怠けものの話

怠けものの話

ちくま文学の森 9

筑摩書房

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

怠けものの話〈ちくま文学の森9〉

一九八九年三月二十九日　第一刷発行

編　者　安野光雅（あんの・みつまさ）
　　森毅（もり・つよし）
　　井上ひさし（いのうえ・ひさし）
　　池内紀（いけうち・おさむ）

発行者　関根栄郷

発行所　株式会社　筑摩書房
　　東京都千代田区神田小川町二―八　〒一〇一―九一
　　電話東京二九一―七六五一（営業）
　　二九四―六七一一（編集）
　　振替口座東京六―四一二三

装　本　安野光雅
印刷所　三松堂印刷
製本所　鈴木製本所

本書の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。
©M. ANNO T. MORI H. INOUE O. IKEUCHI
1989 Printed in Japan
ISBN4-480-10109-8　C0393

蟬（せみ）……堀口大学……2

警官と讃美歌（きんびか）……O・ヘンリー　大津栄一郎訳……3

正直な泥棒（どろぼう）……ドストエフスキー　小沼文彦訳……15

孔乙己（コンイーチー）……魯迅　竹内好訳……55

ジュール叔父（おじ）……モーパッサン　青柳瑞穂訳……65

チョーカイさん……モルナール　徳永康元訳……83

ビドウェル氏の私生活……サーバー　鳴海四郎訳……97

リップ・ヴァン・ウィンクル……W・アーヴィング　斎藤光訳……107

スカブラの話……上野英信……137
懶惰の賦……ケッセル　堀口大学訳……155
ものぐさ病……P・モーラン　堀口大学訳……183
不精の代参……桂米朝演……189
貧乏……幸田露伴……205
変装狂……金子光晴……225
幇間……谷崎潤一郎……233
井月……石川　淳……257
よじょう……山本周五郎……279

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

懶惰の歌留多……太宰　治……325
ぐうたら戦記……坂口安吾……349
大凶の籤……武田麟太郎……369
坐っている……富士正晴……397
屋根裏の法学士……宇野浩二……417
老妓抄……岡本かの子……433
怠惰について　解説にかえて……森　毅……462

怠けものの話

蟬（せみ）

ラ・フォンテエヌのは寓話（ぐうわ）
さてこれはわたくしの愚話（ぐわ）

堀口大学

蟬がゐた。
夏ぢゆう歌ひくらした。
冬が来た。
困った、困った！
（教訓）
それでよかった

警官と讃美歌（さんびか）

O・ヘンリー
大津栄一郎訳

オー・ヘンリー　O Henry　一八六二―一九一〇　本名ウィリアム・シドニー・ポーター。アメリカのノースカロライナ州に生まれる。叔父の薬局で働いたのち放浪生活。テキサスに落ち着いて銀行に勤務中、公金横領の罪で訴えられ、南米に逃亡。その後、妻の死に際して帰国、裁判を受けて五年の刑に服す。服役中に小説を書き始め、出獄後、ニューヨークで作家として大活躍。作品はほとんど短篇小説ばかりで、数百に及ぶ。「警官と讃美歌」は一九〇六年作。

（原題　The Cop and the Anthem）

マディソン・スクェアのいつものベンチで、ソーピーはそわそわと落着けなかった。雁が夜かん高い声で鳴くようになり、あざらしのオーバーを持たない女が夫に優しくなり、ソーピーが落着けなくなってくると、冬が間近に迫ってきたと思ってまず間違いない。

枯葉が一枚ソーピーの膝の上に落ちた。枯葉は霜の精の名刺だ。霜の精は、マディソン・スクェアの常連には親切で、年ごとに訪問する前に堂々と予告する。そこに集まってくる四つの通りのそれぞれの角で、霜の精は、青空屋敷の住人たちが冬支度をできるように、その玄関番の北風に名刺を渡すのだ。

ソーピーは、近づく冬に備えて、ひとりで予算委員会を開かねばならぬ時が来たのを悟った。そしてそのためいつものベンチでそわそわ落着けなくなったのだった。

ソーピーの避寒の願いは、だいそれたものではない。地中海をヨットで旅行したり、眠くなるような南国の空の下に行ったり、ヴェスヴィアス湾で舟遊びしたりとか、そんなことは考えたこともなかった。「島」[1]で三ヵ月暮すのが彼の魂のあこがれだった。三ヵ月間、風の神様や警察の心配などしないで、食べものとベッドと気の合った仲間とを保証されるのが、彼にはなにより願わしいことらしかった。

(1) イースト・リヴァーのなかのブラックウェル島のことで、昔そこに刑務所があった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ここ数年、客あしらいのいいブラックウェル島の「別荘」が彼の冬の寓居だった。毎年冬になると、彼より幸せな同じニューヨークっ子たちがパーム・ビーチやリヴィエラ海岸行きの切符を買うように、彼は毎年「島」に逃げ出すためにつつましい用意をした。前の晩、厚い日曜版の新聞を上着の下とくるぶしのまわりと膝の上にかけて寝たが、そのくらいでは、この古い公園の噴水のそばのベンチでは寒さを撃退することができなかった。だからソーピーの心に「島」が大きくタイミングよく浮かびあがったのだった。慈善の名で行なわれる市の居候たちのための施しを受けるのは、いさぎよしとしなかった。ソーピーの考えでは、慈善より法律の方が親切だった。出かけて行けば、簡素な生活にふさわしい宿舎と食べものを提供してくれる、市や慈善団体の施設は無数にあった。だがソーピーのような誇り高い人間には、慈善の贈りものは重荷だった。慈善の贈りものを受け取るには、金銭の代価ではないにしても、精神的屈辱の代価を払わねばならない。シーザーにブルータスという泣きどころがあったように、慈善のベッドには入浴という税金がついてまわったし、ひと塊りのパンには私事にわたる個人的な身元調査がついてまわった。だから法律の客人になる方がまさっている。法律は、規則ずくめだが、紳士の私事に不当な干渉はしないからだ。

「島」に行く肚をきめると、ソーピーは早速願望の達成にとりかかった。それにはいろいろたやすい方法がある。なかでもいちばん楽しいのは、どこか高いレストランに行って、贅沢に食べ、その後で無一文だと言って、おとなしく騒ぎ立てないで警官に引っぱられる方法だ。それから先は親切な治安判事がうまくやってくれるはずだ。

ソーピーはベンチから立ちあがると、ぶらぶら公園を出て、ブロードウェイと五番街が合流してできる、平坦なアスファルトの海を渡った。それからブロードウェイを北上して、一軒のきらめくレストランの前で立ちどまった。そこは夜ごと最上等の葡萄酒と最上等の絹の服と最上等の人間が集まってくるところだ。

ソーピーはチョッキのいちばん下のボタンから上にかけては自信があった。顔は剃ってあったし、上着はまともだったし、小ぎれいな黒い結びっきりのネクタイは感謝祭の日に婦人伝道者からもらったものだった。見とがめられずにレストランのテーブルに辿りつければ、後は成功まちがいない。テーブルから上の部分なら、ウェイターに怪しまれる心配はないだろう。ソーピーは思った。——真鴨の丸焼き、まあ、そんなところかなと。それからシャブリの葡萄酒とカマンベール・チーズとデミタスのコーヒーと葉巻。葉巻は一ドルと見ておこう。合計しても、レストランの連中からそれほどひどい復讐は受けないですみそうな金額だし、それでいて冬の避難所に旅だつに十分な満腹感と幸福感は与えてもらえるだろう。

ところがレストランのドアの内側に足を一歩ふみ入れたとたん、チーフの眼がソーピーのすり切れたズボンとくたびれた靴に落ちた。たちまち逞しい手につかまれて、くるりと後ろ向きにさせられ、無言のうちに、あっと言うまもなく歩道に押し出された。こうしてあやうく食われるところだった真鴨は恥辱的な運命から救われた。

ソーピーはブロードウェイからそれた。念願の「島」への道は、美食家としては辿れそうもなかった。刑務所にはいる別の手をなにか考え出さねばならない。

六番街の角に、華やかな電燈と板ガラスの奥に上手に飾ってある商品とであたりを圧しているウィンドーがあった。ソーピーは丸石を拾うと、ウィンドーめがけて投げて、割った。警官を先頭に、おおぜいの人間が街角を曲って走ってきた。ソーピーは両手をポケットに入れてじっと立って、警官の真鍮のボタンを微笑を浮かべて眺めた。

「こんなことをした奴はどいつだ」と警官は興奮して訊いた。

「おれかもしれないとは思いませんかね」とソーピーは皮肉まじりに、だが幸運にありついた人間らしい優しい声で、言った。

警官はソーピーの言葉を手がかりとすら考えなかった。窓を叩き割った人間が、法律の代理人とおしゃべりするために、現場に残っているわけはない。そんな奴は一目散に逃げ出すにきまっている。警官は半ブロックほどさきに電車を追いかけて走っている男を見つけた。彼は警棒を引き抜くと、追いかけた。ソーピーはがっかりしてぶらぶら歩き去った。また失敗だ。

通りの向こう側にいっこうさえないレストランが一軒あった。食欲は旺盛だが、ふところのとぼしい連中の御用をつとめる店だ。食器類は厚手で、空気は厚くよどんでいて、スープとテーブル・クロースは薄手だった。ソーピーはその店に、だれにもとがめられないで、口をぱくぱくさせている靴と中身を露出させているズボンをはいて、はいっていった。テーブルに坐ると、ビフテキとホットケーキとドーナツとパイを平らげた。それから無一文だという事実をウェイターにうち明けた。

「さあ、さっさとお巡りを呼んでこい」とソーピーは言った。「紳士を待たせてはいかんだろう」

「お前たちのような連中にお巡りの必要はない」とウェイターはマンハッタン・カクテルのなかのさくらんぼのような眼をして、しゃがれ声で言った。「おーい、コン。頼むよ」

ソーピーは二人のウェイターにほうり出され、無情な舗道にきれいに左耳を押しつけていた。それから、大工の折尺を伸ばすような工合に、関節をひとつずつ伸ばして、起きあがり、着物のほこりをはらった。逮捕はばら色の夢にすぎないようだった。「島」は遠い、遠いところのようだった。二軒さきのドラッグストアの前に警官が立っていたが、声をたてて笑っただけで、通りすぎていった。

五ブロックほど歩くと、また逮捕される努力をする勇気が湧いた。運よく、こんどは、おろかにも「成功まちがいなし」と思いこんだ事態が降って湧いた。つつましやかな、さっぱりした服装の若い女が、ショーウィンドーの前で、ひげ剃り用のコップとインクスタンドに目を輝かして見入っていた。そしてそこから二ヤードほどのところに、いかめしい態度の大男の警官が消火栓にもたれて立っていた。

ソーピーは卑劣でいやらしい「女たらし」の役を演じることにした。犠牲者は洗練された、優雅な容姿だったし、そばには謹直そうな警官がいるのだから、こんどこそは、警官にすぐに気持よく逮捕され、あの、小さな、小ぢんまりした島でまちがいなく冬を過ごすことができるだろうと思った。

彼は婦人伝道者からもらった結びっきりのネクタイを直し、しりごみしたがるカフスを袖口にひっぱり出し、帽子をだてに斜めにかぶって、若い女の方ににじり寄っていった。それから色目を使ったり、突然、咳ばらいしたり、「エヘン」と言ったり、微笑したり、にやりと笑ったり、臆面もなく、厚かましく下劣な「女たらし」の常套的な手口を使い始めた。警官がじっとみつめているのが横目で分った。女は二、三歩遠ざかった。それからまたひげ剃り用のコップをじっとみつめた。ソーピーは後を追って、大胆に彼女のそばに寄ると、帽子をとって言った。

「やあ、ベデーリア！　おれの家に来て、遊ばないか」

警官はまだ見ていた。言い寄られた女がちょっと指で合図さえすれば、もう「島」の楽園に着いたも同然だ。警察署の気持のいい暖かさがもう肌に感じられるような気がした。若い女は彼の方に向き直ると、手をさし出して、上着の袖を押えた。

「いいわよ、マイク」と女は嬉しそうに言った、「ビールを一杯ご馳走してくれるんなら。もっと早く声をかけたかったんだけど、お巡りが見てたでしょ」

若い女にオークの木にからみつく蔦のようにからまれながら、ソーピーは警官の前を通りすぎた。がっかりだった。永遠に自由の身のままの運命のようだった。

角を曲ると、女をふりほどいて駈け出した。立ちどまったところは、夜になると、華やいだ通りと浮き浮きした気分と愛の囁きと陽気な歌声が現出する地域だった。毛皮を着た女やオーバーを着こんだ男が冬空の下を楽しそうに歩き回っていた。ソーピーは突然恐怖に襲わ

れた。自分は恐ろしい魔法にかけられて、ぜったいに逮捕されないようになっているような気がした。そう思うと少し恐慌を来たした。そして、こうこうたる劇場の前で警官がもったいぶってぶらぶらしているのにぶつかると、「治安妨害」という最後の藁にすがりついた。

ソーピーは歩道の上で耳ざわりな声を張りあげて、酔払いのたわ言をわめき始めた。そして踊ったり、どなったり、暴れたり、その他にもいろんなことをして、夜空をかき乱した。

警官は警棒をくるくる回しながら、ソーピーに背を向けると、一人の市民に言った。

「エール大学の学生がお祝い騒ぎをやっているんだ。ハートフォード大学を零敗させたものでね。やかましいが、別に害はない。ほうっておけという命令が出ているんだ」

やり切れない気持で、ソーピーは無駄な馬鹿騒ぎをやめた。お巡りはどうしてもおれを逮捕してくれないのだろうか？「島」は所詮たどりつけない理想郷のような気がした。ソーピーは冷たい風に吹かれて、薄い上着のボタンをはめた。

一軒の煙草屋の店さきで、身なりのいい紳士がぶらさげてあるライターで葉巻に火をつけていた。紳士は店にはいるとき、入口のわきに絹の傘をたてかけていた。ソーピーは店内にはいると、傘をつかみ、それからゆっくりと出てきた。火をつけていた男は、あわてて追いかけてきた。

「私の傘だよ」と男はきびしい口調で言った。

「おや、そうかね」とソーピーは、軽窃盗罪に侮辱罪まで加えようとして、馬鹿にしたように言った。「そんなら、どうしてお巡りを呼ばないんだ？　おれは盗んだんだろ。あんたの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co